

# 漆の郷土玩具

A2201010 笠間理沙

## ◆ 研究の目的

私は2年間漆芸について勉強し、自分が育ってきた会津の地について考える機会を持った。そこで自分が学んだ漆芸技法を用いて故郷を表現したいと思うようになった。

故郷について考えたとき思い浮かんだのが故郷に伝わる民話や伝承という昔話である。現在ではそれらがまとめられた書籍や、語り部さんの講話会などでしか耳にしないという方も多いただろう。このままでは昔話は一部の愛好家を除いていずれその土地の人々の記憶からなくなってしまうのではないだろうか。これら昔話はいずれもその地域の特色を、昔の人々の生活や願いが伝えられている。私はこれらの昔話を残す手段として郷土玩具に着目した。郷土玩具には形のモチーフとしてその地域の昔話をもとになったものが数多くある。また、これまで学んだ漆の特性を生かした新しい郷土玩具として物語を残していけないだろうかとも考えた。郷土玩具には漆を使用していたものもあり、会津の伝統産業である漆と今一度組み合わせることで新しい特産品にすることも出来るのではないだろうか。手に取れる昔話として地域を感じ取れるものにしたいと思い研究制作の目的とした。

## ◆ デザインについて

民話「猪苗代の由来」、「猫魔の化け猫退治」、「鴛鴦伝説」、「御山の権坊キツネ」、「猪苗代湖の主」をもとに作成。

各民話の内容がわかるように話の一場面を表現し、台座として使える絵本も同時に制作する。

## ◆ 作業工程

1. スタイロフォームで原型製作
2. 紙貼り
3. 型抜き
4. 摺り漆
5. 錆付け（場合によっては二辺地をつけてから錆付け）
6. 捨て塗り
7. 追い錆
8. 塗り 下塗り  
中塗り  
上塗り
9. 絵付け



紙張り



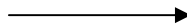
型抜き



摺り漆



錆付けおよび二辺地付け



塗り

## ◆ 考察と感想

制作にあたり郷土玩具について調べると昔の玩具の造形の奥深さやモチーフになる語やそれに込められた願いの奥深さを感じた。自分が形を考え作成するときには既存の郷土玩具に影響されすぎないように形を考えるのは想像以上に難しかった。日々の作業は一つの張り子を作るために何層も新聞紙を貼るので思った以上に時間がかかってしまい、漆を塗る段階になっても表面の凹凸が多く、研いでいると張り子の紙の部分が出てきてしまい苦労した。また、形の複雑な立体に漆を塗るのが初めてだったため、厚く塗りすぎてしまい乾燥に時間がかかってしまったなど反省点は多い。しかし何層も新聞紙を貼り合わせた張り子は丈夫で、布を張らなくてもよいなど紙の強靭さを実感した。紙と漆の組み合わせは昔からあるものだが張り子に漆を塗ったことにより漆の色合いや美しさを再認識できたと思う。

卒業研究を通して自分の思っているものを形にする難しさと自分の考えを他人に伝える難しさを痛感した。しかしその分物を作ることに対しての意識や他人に伝えることを念頭において作成することを学べた。時間と手間のかかる作業の連続だったがその分学ぶものも多かった。これからもこの短大で学んだことを忘れず生きていこうと思う。